

# 諸聖神父の主日聖体礼儀

## 単音聖歌譜



## 司祭祈祷

注意 譜面中、五線譜上に ||○|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2016年2月25日

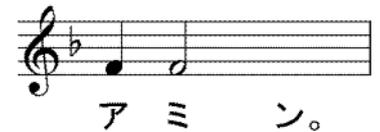
釧路ハリストス正教会

管轄司祭ステファン内田圭一

2024年6月3日 一部改訂

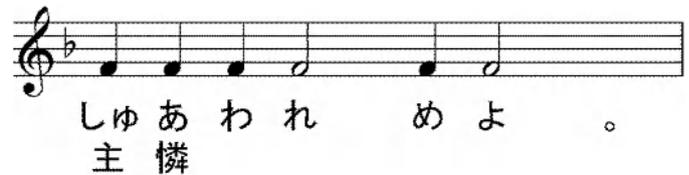
司祭) ( 黙誦 : ハリストス我等の神よ、爾は光榮の中に天に升起、聖神を遣すを約して、門徒を喜ばしめ給えり、彼等爾の祝福に依りて爾が神の子、世界の贖罪主たるを確められしに因る。至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、 )

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世に、

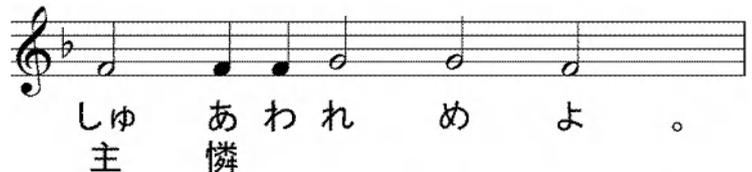


【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



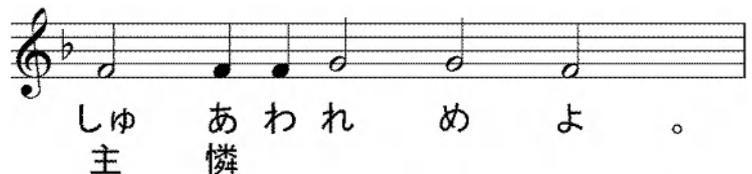
司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



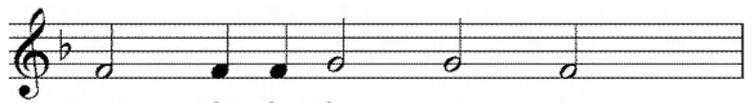
司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

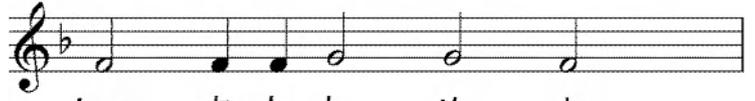


司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



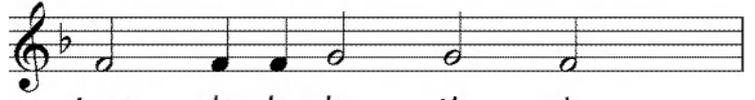
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの  
我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



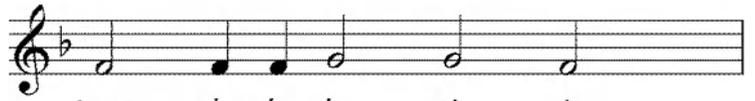
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの  
此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



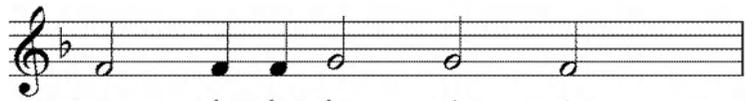
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの  
氣候 順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



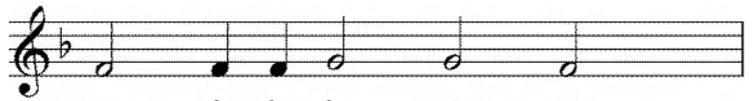
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ  
航海する者、旅行する者、病 を患うる者、艱難に遭う者、擄 となりし者、及び  
かれら すくい ため しゅ いの  
彼等の 救 の爲に主に禱らん、



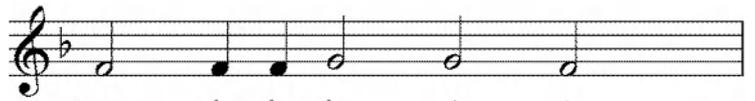
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの  
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾 の恩 寵 を以て、我等を 佑け救い 憐 み 護れよ、

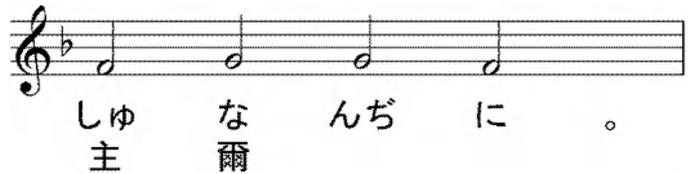


しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生 神女、永貞童女マリヤと、

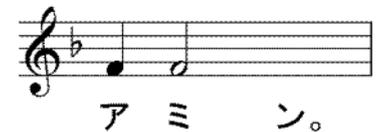
しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸 聖人を記憶して、我等 己 の身及び 互 に 各 の身を以て、並 に 悉 くの我等の

いのちもつ、<sup>かみ</sup>ハリストス神に<sup>いたく</sup>委託せん、



司祭) ( 黙誦：<sup>しゅわ</sup>主我が<sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>けんぺい</sup>権柄は<sup>かたど</sup>像り<sup>がた</sup>難く、<sup>こうえい</sup>光榮は<sup>はか</sup>測り<sup>がた</sup>難し、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>じんじ</sup>仁慈は<sup>かぎ</sup>限  
<sup>な</sup>り<sup>じんあい</sup>無く、<sup>い</sup>仁愛は<sup>がた</sup>言い<sup>もと</sup>難し、<sup>しゅさい</sup>求む<sup>なんぢ</sup>主宰よ、<sup>じれん</sup>爾の<sup>よ</sup>慈憐に<sup>みづか</sup>因りて、<sup>われら</sup>親ら<sup>こ</sup>我等と此の  
<sup>せいどう</sup>聖堂とを<sup>かえり</sup>眷み、<sup>われら</sup>我等<sup>われら</sup>及び我等と<sup>とも</sup>偕に<sup>いの</sup>禱る<sup>もの</sup>者に<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>ゆたか</sup>豊なる<sup>おんたく</sup>恩澤と<sup>なんぢ</sup>爾の  
<sup>あいれん</sup>愛憐とを<sup>ほどこ</sup>施し<sup>たま</sup>給え、 )

司祭) <sup>けだし</sup>蓋、<sup>およ</sup>凡そ<sup>こうえい</sup>光榮<sup>そんき</sup>尊貴<sup>ふくはい</sup>伏拜は<sup>なんぢ</sup>爾<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいしん</sup>聖神に<sup>き</sup>歸す、<sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世世に、



【 第一アンティフォン 第102聖詠 】

わ が た ま し い よ 、 しゅ を ほ め あ げ よ 、 しゅ よ なん  
我 靈 主 讚 揚 主 爾  
ぢ は あ が め ほ め ら る 。 わ が た ま し い よ 、  
崇 讚 我 靈  
しゅ を ほ め あ げ よ 、 わ が ちゅう しん よ 、 そ の せい  
主 讚 揚 我 中 心 其 聖  
な る な を ほ め あ げ よ 。  
名 讚 揚  
わ が た ま し い よ 、 しゅ を ほ め あ げ よ 、 か れ が  
我 靈 主 讚 揚 彼  
こ と ご と く の おん を わ す る な か れ 。  
悉 恩 忘 勿

か れ は なんぢ が も ろ も ろ の ふ ほ う を ゆ る  
 彼 爾 諸 不 法 赦  
 し 、 なんぢ が も ろ も ろ の や ま い を い や す 。  
 爾 諸 疾 療  
 こ お え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。  
 光 榮 父 子 聖 神 歸  
 い ま あ も お い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
 今 何 時 世 世  
 わ が た ま し い よ 、 し ゅ を ほ め あ げ よ 、 わ が ち ゅ  
 我 靈 主 讚 揚 我 中  
 う し ん よ 、 そ の せ い な る な を ほ め あ げ よ 、  
 心 其 聖 名 讚 揚  
 し ゅ よ 、 なんぢ は あ が め ほ め ら る 。  
 主 爾 崇 讚

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ <sup>しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

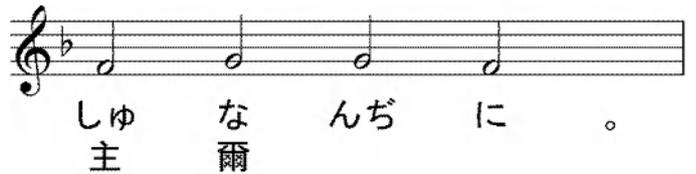
司祭) かみ <sup>なんぢ おんちよう もつ</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) しせいしけつ <sup>いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん <sup>きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ 生命を以て、ハリストス神に委託せん、  
かみ いたく



司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會  
の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力  
を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、 )

司祭) 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第二アンティフォン 第145聖詠 】

わ が た ま し い よ しゅ を ほ め あ げ よ 、 わ れ い け  
我 靈 主 讚 揚 我 生  
る う ち しゅ を ほ め あ げ ん 。 わ れ ぞ ん め い の う ち  
中 主 讚 揚 我 存 命 中  
わ が か み に う た わ ん 。  
我 神 歌  
ぼ く は く を た の む な か れ 、 す く う  
僕 伯 恃 母 救  
あ た わ ぎ る ひ と の こ を た の む な か れ 。  
能 人 子 恃 母  
しゅ は た び び と を ま も り 、 み な し ご と  
主 鞮 人 護 孤 子

やもめとをたすけ、ただふけんしゃのみちを  
 寡婦を佑惟不虔者途  
 くつがえす。  
 覆  
 しゅはいえんにおうとならん。シオンよなんぢ  
 主永遠王王爾  
 のかみはよよにおうとならん。  
 神世世王

【 神の獨生の子 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
 光榮父子聖神歸今  
 いつもよよに、アミン。  
 何時世世  
 かみのどくせいのこならびにことばよ、  
 神獨生子並言  
 しせざるものにしてわれらをすくわんがため  
 死者我等救爲  
 あまんじてせいなるしょうしんぢよ・えいていどうぢよ  
 甘聖生神女永貞童女  
 マリヤよりみをとり、かみのせいをかえ  
 身取神性か易  
 ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、  
 人十字架釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、  
 死以死踏破神  
 せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんとと  
 聖三者一父聖神共  
 もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす  
 讚榮主我等救  
 くいたまあえ。  
 給

【 小聯禱 】

司祭) <sup>われらまたまたあんわ</sup>我等復又<sup>しゅ いの</sup>安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。  
 主憐主憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

<sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>  
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup>  
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup>  
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに、  
 主爾

司祭) ( 黙誦: <sup>われら こ こうどうわごう きとう たま かつ にさんにんなんぢ な よ あつ もの</sup>我等に此の公同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者に

<sup>そのもと ところ たま やく しゅ なんぢみづか いま なんぢ しよぼく ねがい その</sup>  
 も其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其

<sup>りえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ えいえん</sup>  
 利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の

<sup>いのち え たま</sup>  
 生命を得るを給え、 )

司祭) <sup>けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま</sup>蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も

いつよよ  
何時も世に、



【 第三アンティフォン 眞福九端 】

しゅよなんぢのくににきたらんと き、  
主 爾 國 來

われらをおもいたまえ。こころのま貧  
我 等 記 憶 給 心(神・しん) の 貧

づしきものはさいわいな り、てんごくはか彼  
者 福 天 國 彼

れらのものなればなり。  
等 有

なくものはさいわいな り、かれらな慰  
泣 者 福 彼 等 慰

ぐさみをえんとすればなり。  
得

おんぢゅうなるものはさいわいな り、か彼  
温 柔 者 福 彼

れらちをつがんとすればなり。  
等 地 嗣

ぎいにうえかわくものはさいわいな  
義 飢 渴 者 福

り、かれらあくをえんとすればなり。  
彼等飽得

あわれみあるものはさいわいなり、  
矜恤者福

かれらあわれみをえんとすればなり。  
彼等矜恤得

こころのきよきものはさいわいなり、  
心清者福

かれらかみをみんとすればなり。  
彼等神見

わへいをおこのうものはさいわいな  
和平行者福

り、かれらかみのことなづけられんとすれば  
彼等神子名

なり。

ぎのためいきんちくせらるるものはさいわ  
義爲窘逐者福

いなり、てんごくはかれらのものなれば  
天國彼等有

なり。

ひとわれのためになんぢらをのしりきいん  
人我爲爾等詬奢

ち く し 、 なんぢ ら の こ と を い つ わ り て も ろ  
 逐 爾 等 事 譎 諸

も ろ の あ し き こ と ば を い わ ん と き は なんぢ ら さ い  
 惡 言 言 時 爾 等 福

わ い な り 、 よ ろ こ び た の し め よ 、  
 喜 樂

て ん に は なんぢ ら の む く い お お け れ ば な り 。  
 天 爾 等 賞 多

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅさい</sup>主 <sup>しゅ</sup>宰・<sup>われら</sup>主・<sup>かみ</sup>我等の神、<sup>しよてん</sup>諸天に<sup>てんしおよ</sup>天使及び、<sup>てんししゅ</sup>天使首の<sup>ひんきゆう</sup>品級と<sup>ぐんたい</sup>軍隊とを立て

<sup>なんぢ</sup>て爾が<sup>こうえい</sup>光榮の<sup>ほうじしゃ</sup>奉事者と<sup>もの</sup>なしし者よ、<sup>もと</sup>求む<sup>われら</sup>我等の<sup>い</sup>入るに<sup>ともな</sup>伴いて、<sup>か</sup>彼の<sup>われら</sup>我等と

<sup>とも</sup>偕に<sup>つと</sup>務め、<sup>とも</sup>共に<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>しぜん</sup>至善を<sup>さんえい</sup>讚榮する<sup>せいてんしら</sup>聖天使等の<sup>い</sup>入るを<sup>いた</sup>致させ<sup>たま</sup>給え、<sup>けだし</sup>蓋、<sup>およ</sup>凡

<sup>こうえい</sup>そ光榮<sup>そんきふくはい</sup>尊貴<sup>なんぢちち</sup>伏拝は<sup>こ</sup>爾<sup>せいしん</sup>父と<sup>き</sup>子と<sup>いま</sup>聖神に<sup>いつ</sup>歸す、<sup>よよ</sup>今も何時も<sup>よよ</sup>世に、 )

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、<sup>つつし</sup>肅<sup>た</sup>みて立て、

【 聖入の句 】

き た れ 、 ハ リ ス ト ス の ま あ え に ふ し お が  
 來 前 伏 拜

ま あ ん。 か み の こ し よ り ふ く か つ せ  
 神 子 死 復 活

し し ゅ よ 、 なんぢ に ア リ ル イ ヤ を た て ま つ  
 主 爾 奉

る も の お を す く い た ま あ え 。  
 者 救 給

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使軍爾墓現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番兵死し者のご如し、マリアは墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立爾潔體尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾地獄に誘

して、ぢごくをとりにし、いのちをた賜  
 地獄に虜に生命賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者處女逢給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死復活主光榮

なんぢにきいす。  
 爾歸

【 升天祭のトロパリ 第4調 】

ハリストスわれらのかみよ、なんぢはこうえい  
 我等神爾光榮

のうちにてんにのぼり、せいしんをつかわす  
 中天升聖神遣

をやくして、もんとをよろこばしめたまえ  
 約門徒喜給

り、かれらなんぢのしゆくふくによりて、なんぢ  
 彼等爾祝福依爾  
 がかみのこ、せかいのしよくざいしゆたるを  
 神子世界贖罪主  
 たしかめられしによる。  
 確因

【 諸聖神父のトロパリ 第8調 】

あがめほめらるるかなハリストスわれらのかみ、  
 崇讚哉我等神  
 こおみようとてちじょうにわがしよしんぷをた立  
 光明地上我諸神父立  
 て、かれらをもつてわれらしゆうをまこと  
 彼等以我等衆眞  
 のおしえにみちびきしものや、いたりてじ慈  
 教導者至慈  
 れんなるしゆよ、こうえいはなんぢにき  
 憐主光榮爾んぢにき  
 す。

【 諸聖神父のコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。  
 光榮父子聖神歸

しょし との せんでん としょしんぶ の ていり とは きょうか  
 諸使徒 宣傳 諸神父 定 理 教 會  
 い の た め に ゆ い い つ の お し え を か た め た  
 爲 惟 一 教 固  
 り 、 か く きょう か い は てんじょう の しんが く が お り  
 斯 教 會 天 上 神 学 が お 織  
 た る しんじ つ の こ ろ も を き て 、 か み の お し  
 眞 衣 衣 神 教  
 え の お お い な る お う ぎ を た だ し く と き 、  
 大 奥 義 正 解  
 か つ さ ん え い す 。  
 且 讚 榮 矣 。

【 升天祭のコンダク 第6調 】

い ま も い つ う も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 今 何 時 う も よ よ 世 世 に 、 ア ミ ン。  
 ハリス トス われ ら の か み よ 、 なんぢ は われ ら に  
 我 等 神 爾 我 等  
 お け る て い せ い を な し お え て 、 ち の も の  
 於 定 制 を 爲 し 畢 えて 、 地 の 者  
 を てん に あ わ せ て 、 こ う え い の う ち に の 升  
 天 合 光 榮 中 升  
 ぼ り た れ ど も 、 い づ こ よ り も は な れ ざ  
 何 處 離

り き、すなわちわかるるなくとどま  
乃 別 留

りて、なんぢをあいするものによお  
爾 愛 者 呼

ぶ、われなんぢらとともにす、ひとの  
我 爾 等 人

なんぢらにてきするな あし。  
爾 等 敵

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませい  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
しょうしんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる  
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
 常生者の我等を憐  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖なるかみ、聖なる勇毅、聖  
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 常生者の我等を憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖なる神、聖なる勇毅  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖常生者の我等を憐  
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん  
 光栄父と子聖神  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸今何時世世に、アミン。  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖常生者の我等を憐  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖なるかみ、聖なる勇  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 毅、聖常生者の我等を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 提綱に代えて諸祖の歌 第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世に讃美讃榮せらる、

しゅ わ が せん ぞ の か み よ 、 なん ぢ は さ ん よ う せ  
主 我 先 祖 神 爾 讃 揚  
ら れ 、 なん ぢ の な は よ よ に さ ん び さ ん え い せ え  
爾 名 世 世 讃 美 讃 榮  
ら る 。

誦經) 蓋爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり

しゅ わ が せん ぞ の か み よ 、 なん ぢ は さ ん よ う せ  
主 我 先 祖 神 爾 讃 揚  
ら れ 、 なん ぢ の な は よ よ に さ ん び さ ん え い せ え  
爾 名 世 世 讃 美 讃 榮  
ら る 。

誦經) 主我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、



【 アポストロス 使徒經 44 端 聖使徒行實 20 章 16 節～18 節、28 節～36 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒行實の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 彼の曰パウエルは舟行して、エフェスを過ぎんと定めたり、アジアに久しく留まらざらん爲なり、彼能すべくば、五旬節の日にエルサリムに在らんと欲したればなり。彼はミルトよりエフェスに人を遣して、教會の長老等を召したり。彼等が來りし時、之に謂えり、爾等自ら慎み、亦全群を慎め、乃聖神爾等を其中に立てて、監督と爲し、主神が己の血を以て獲たる教會を牧せしむ。蓋我知る、我が去りし後、殘忍なる狼、群を惜まざる者は、爾等の中に入らん、爾等の中よりも人人起りて、門徒を誘い、己に從わしめん爲に、理に悖る事を語らん。故に徹醒して、我が三年間晝夜斷えず、涙を以て爾等各人を誨えしを憶え。兄弟よ、今我爾等を神及び其恩寵の言、爾等を建て、爾等に凡の聖せられし者の中に嗣業を與うるを能する者に託す。人の金銀衣服は、我未だ之を貪らざりき。爾等自ら知る、此の我が手は我及び我と偕に在りし者の需に供せしを。凡の事に於て我爾等に斯く勞して、柔弱者を扶け、且主イイススの言を憶う可きを示せり、蓋彼自ら云えり、與うるは受くるよりも更に福なりと。言い竟りて、彼膝を屈めて、衆と偕に禱れり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) それは、パウロがアジアで時間をとられないため、エペソには寄らないで続航することに決めていたからである。彼は、できればペンテコステの日には、エルサレムに着いていたかったので、旅を急いだわけである。そこでパウロは、ミルトからエペソに使をやって、教會の長老たちを呼び寄せた。そして、彼のところに寄り集まってきた時、彼らに言った。「わたしが、アジアの地に足を踏み入れた最初の日以来、いつもあなたがたとどんなふうにご存じである。どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教會を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになった

のである。わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」。こう言って、パウロは一同と共にひざまずいて祈った。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 第1調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ、 アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>しよしん かみしゅ ことば いだ ち め ひ い ところ ひ い ところ いた</sup> 諸神の神主は言を出して地を召す、日の出づる處より日の入る處に至る。

アリル イ ヤ、 アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

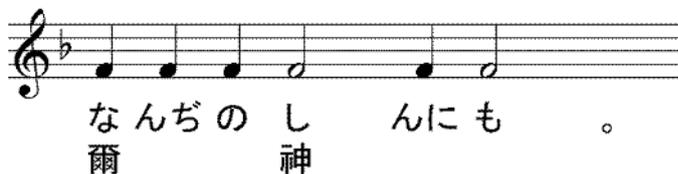
誦經) <sup>われ せいしゃ まつり もつ われ やく むす もの わ まえ あつ</sup> 我の聖者、祭を以て我と約を結びし者を我が前に集めよ。



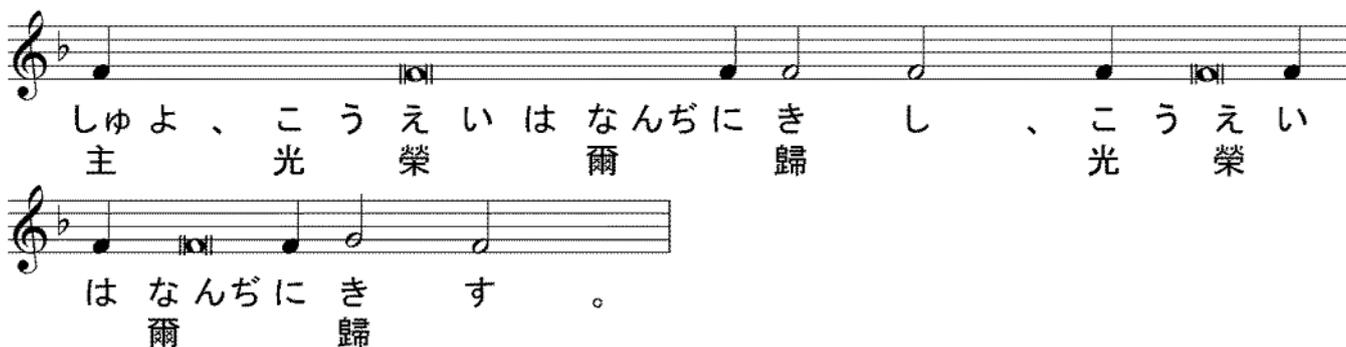
司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん</sup>人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念  
<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup>の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を  
<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup>畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所  
<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup>を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、  
<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup>爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし  
<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup>て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書56端 17章1~13節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup>睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup>イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き か とき そのめ てん あ い ちち ときいた なんぢ こ</sup>謹みて聴くべし、彼の時イイスス其目を天に擧げて曰えり、父よ、時至れり、爾の子  
<sup>えい なんぢ こ なんぢ えい ため けだしなんぢ かれ およそ にくたい うえ けん あた</sup>を榮せよ、爾の子も爾を榮せん爲なり、蓋爾は彼に凡の肉體の上の權を與え  
<sup>かれ およ なんぢ かれ あた もの えいえん いのち あた ため えいえん いのち</sup>たり、彼が凡そ爾の彼に與えし者に永遠の生命を與えん爲なり。永遠の生命とは、  
<sup>すなわちなんぢ どくいつ まこと かみ およ なんぢ つかわ し これ</sup>即爾、獨一の眞の神、及び爾が遣ししイイススハリストスを知ることは是なり。

われすで なんぢ ち えい なんぢ われ あた おこな わざ な いまなんぢちち われ  
 我 己に 爾 を地に榮し、 爾 が我に與えて 行 わしむる 事 を成せり。 今 爾 父よ、 我を  
 して 爾 に在りて 榮 を享けしめよ、 即 創 世の先に我が 爾 に在りて 有 ちたる 榮 なり。  
 なんぢ よ うち われ あた ひとびと われなんぢ な あらわ かれら なんぢ ぞく なんぢかれ  
 爾 が世の中より我に與えし 人 人に、 我 爾 の名を 顯 せり、 彼等は 爾 に屬し、 爾 彼  
 ら われ あた かれらなんぢ ことば まも いまかれら およ なんぢ われ あた もの みな  
 等を我に與えたり、 彼等 爾 の 言 を守れり。 今 彼等は 凡そ 爾 が我に與えし者、 皆  
 なんぢ し けだしわれ なんぢ われ あた ことば かれら あた かれらこれ う  
 爾 よりするを知れり、 蓋 我は 爾 が我に與えし 言 を彼等に與えたり、 彼等之を受け、  
 かつわれ なんぢ い まこと し またなんぢ われ つかわ しん われ かれら ため  
 且 我が 爾 より出でしを 誠 に知り、 亦 爾 が我を 遣 ししを 信ぜり。 我は彼等の爲に  
 いの よ ため いの すなわちなんぢ われ あた もの ため けだしかれら なんぢ ぞく およ  
 祈る、 世の爲に祈らず、 乃 爾 が我に與えし者の爲なり、 蓋 彼等は 爾 に屬す。 凡  
 われ ぞく もの なんぢ ぞく なんぢ ぞく もの われ ぞく われ かれら うち えい  
 そ我に屬する者は 爾 に屬し、 爾 に屬する者は我に屬す。 我は彼等の中に 榮せられ  
 われ これ よ あ かれら よ あ われなんぢ ゆ せい ちち なんぢ われ あた  
 たり。 我は是より世に在らず、 彼等は世に在り、 我 爾 に往く、 聖なる父よ、 爾 が我に與  
 もの なんぢ な よ これ まも かれら われら ごど いつ な われかれら とも  
 えし者は、 爾 の名に因りて之を守りて、 彼等を我等の如く 一と爲らしめよ。 我 彼等と 偕  
 よ あ とき なんぢ な よ かれら まも なんぢ われ あた もの われこれ まも  
 に世に在りし時、 爾 の名に因りて彼等を守れり、 爾 が我に與えし者は、 我 之を守り、  
 そのうちひとり ほろ ただちりん こ ほろ せいしよ かな いた いまわれなんぢ ゆ われ  
 其 中 一 も亡びず、 惟 沈 淪の子は亡びたり、 聖 書 の 應 うを致す。 今 我 爾 に往く、 我  
 よ あ これ い かれら おのれ うち われ まつた よろこび たも ため  
 世に在りて之を言う、 彼等が 己 の内に我の 全 き 喜 を有たん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあらわしました。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。いま彼らは、わたしに賜わったものはすべて、あなたから出たものであることを知りました。なぜなら、わたしはあなたからいただいた言葉を彼らに与え、そして彼らはそれを受け、わたしがあなたから出たものであることをほんとうに知り、また、あなたがわたしをつかわされたことを信じるに至ったからです。わたしは彼らのためにお願ひします。わたしがお願ひするのは、この世のためにではなく、あなたがわたしに賜わった者たちのためです。彼らはあなたのものであるのです。わたしのものは皆あなたのもので、あなたのものでわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らと一緒にいた間は、あなたからいただいた御名によって彼らを守り、また保護してまいりました。彼らのうち、だれも滅びず、ただ滅びの子だけが滅びました。それは聖書が成就するためでした。今わたしはみもとに参ります。そして世にいる

間にこれらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためであります。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸 す。

※聖体礼儀③（金ロイオン聖体礼儀）へ